

氏名	ササキ 佐々木	タカシ 崇
学位の種類	博士（音楽）	
学位記番号	博音第191号	
学位授与年月日	平成23年3月25日	
学位論文等題目	〈作品〉 R. Schumann Fantasie in C-dur op. 17 R. Schumann Klavier quintett Es-dur op. 44 〈論文〉 R. シューマンの初期ピアノ曲のモットー構想－象徴的核音型の 回帰手法をめぐって－	
論文等審査委員		
（総合主査）	東京芸術大学	教授（音楽学部） 迫 昭 嘉
（副査）	〃	〃（ 〃 ） 植 田 克 己
（ 〃 ）	〃	准教授（ 〃 ） 伊 藤 恵
（ 〃 ）	国立音楽大学	教授 藤 本 一 子

（論文内容の要旨）

本論文は、いわゆるモットー音型というものが音楽全体においていかなる役割を担うものであるのかということ、ローベルト・シューマン Robert Schumann (1810-1856) の主に初期のピアノ作品において検証し、それらの繋がりからシューマンの「モットー構想」という形式構想の一端を明らかにしようとする試みである。

音楽的モットーとは、一つの作品の様々な箇所でも繰り返し現れる短い楽句または動機を指すものと考えられるが、その定義は極めて曖昧でこれまで漠然と用いられているに過ぎず、その実態と使われ方が整理されたことはなかった。シューマンのモットーについては前田昭雄氏がその著作で記述し、モットー構想の重要性について指摘しているが、(*Robert Schumanns Weg zur Symphonie*. Zürich: Mainz, 1992.)、その根本的な作用を十分には説明しきれていないように思う。本論は、シューマンのピアノ曲にみられるモットー音型なるもののあらわれ方を諸状況から洗い出し、そこに共通する最大公約数ともいえる要件を導き出す初めての試みである。

本論では、第1章でモットーという言葉の持つ曖昧さをはっきりさせるため、言語的モットー概念と音楽的モットー概念とに分けて論じ、音楽的モットーが言語的モットーの意味を超えて音楽構造上の概念として用いられていることを示した。その上で、シューマンのモットー音型がどのようなものであるのかの事例として先行文献である前田氏の著作（前述）から交響曲第1番と交響曲第2番を取り上げ、さらに他の作曲家の事例としてベートーヴェンの《告別》ソナタとリストのピアノ・ソナタ短調をモットー構想の見地から独自に分析することで、他の作曲家によるモットー構想の違いを明らかにした。その事例をもとに、第2章ではシューマン初期のピアノ曲の中で、そうしたモットー音型と呼ばれるものがいかなるあり方で現前しているか客観的に検証するために、筆者がモットー音型と呼びたい音型を取って象徴的核音型として取り出し、それらがどのように現れてくるのかを作曲背景を含めた分析として検証した。その結果、象徴的核音型は楽曲を構造的かつ暗示的次元において支える役割を果たし、楽曲全体を率いて行く理念的・示導的な役割を担う音型だということが明らかにされた。これをふまえて第3章では、象徴的音型をモットー音型と呼ぶことにし、それらについてもう一度整理し、まとめ直すことを通して、シューマンの音楽的モットー構想を再考した。

最終的に、シューマンのモットー音型は「(時間的に) 拡大され」、「形式構造の要と目される位置に」、

「暗示的な作用を伴って」回帰することが導きだされた。そして、これらのあらわれ方をするモットー音型により、作品全体に暗示的次元の形式構造を生み出す作曲構想をシューマンのモットー構想であると定義付けすることができると考えられる。初期のピアノ作品において筆者がモットー構想と呼んだ形式構想が多くみられることから、シューマンがとくに初期においてこうした形式観への志向性を持っていたことが明らかになった。またさらにモットー構想の特徴を用いて他の作品の作品理解を広げることができた。分析によってモットー音型をモットー構想として理解し体系立てて整理することで、シューマンのモットー構想の本質がみえてきたように思う。漠然と捉えられていたモットーがわずかでも実態を持って理解されれば本論文の意義は少なくないと思う。

音楽は時間芸術である。時間の経過の中である特定の音型が回帰するというモットー構想は、まさに時間を実現する演奏行為によってこそ理解される。モットー音型は回帰することで時間の隔たりを意味ありげに繋いでいく。その暗示性が音楽の心的プロセスを明らかにするが、それだけでは十分ではない。つまり、モットー構想の暗示的な次元を認識しつつ、基礎的な形式、動機の構造原理の中に浸透させていくことが重要なのである。

(総合審査結果の要旨)

「R. シューマンの初期ピアノ曲のモットー構想」と題された論文で、執筆者はシューマンの「モットー構想」というものに着目し、それがどのような機能的側面を持つかを作品の分析によって現象として顕かにすることを試みた。先行研究も充分ではない中、多くのシューマン作品の中にモットー音型といえるものが存在するという事実を、本人は演奏理解の問題との関連で捉えており、その姿勢はピアニストによる研究としての独自性が認められる。

論文では、まず「モットー」概念を言葉で検証した後、象徴的であり暗示的だとする音型を「象徴的核音型」と位置づけ、初期のピアノ曲7曲のほか交響曲、協奏曲などの作品にその音型がどのように組み込まれているかを分析、最大公約数的に共通項を導き出すことでそれをモットー構想に結び付ける、という方法を取った。しかし、主題や動機との明確な区別が示しきれないまま、特定の音型をモットー音型だと言い切るその論拠について説明不足である。また、モットーが「論理的な形式構造の要として機能」していることを導き出した意義は非常に大きいですが、シューマン作品のほかベートーヴェンやリストの作品にも言及していた分析は、曲によって精度に差があるうえ、作品数も充分ではなかったのではないか。詩的、暗示的といった言葉の曖昧さに安易に帰結している点でも更なる明解さが求められる。とはいえ、限定された範囲ではあるが「象徴的＝モットー的音型」を形式構造に位置づけて提示したことは高く評価されよう。

リサイタルではシューマンの幻想曲とピアノ五重奏曲の二曲が演奏された。論文では言葉での説明に困難さがうかがえた「モットーの回帰（時間的経過）によって生まれる詩的・暗示的なもの」を、音を通じて伝えようとする意気込みの感じられる演奏であった。幻想曲では、彼独特の響きからファンタジーが溢れ出ていたが、より豊かな音創りが求められよう。五重奏曲では弦楽器群とのやりとりにもっと余裕が欲しかったが終楽章まで一気に突き進んだ熱演であった。演奏・研究ともに今後の更なる掘り下げに大いに期待したい。

論文・演奏ともに総合して合格とする。